

# 記述式における語彙的複合動詞の意味推測の正確さ —モンゴル語を母語とする日本語学習者の場合—

谷内 美智子

How accurately can Mongolian-speaking Japanese language learners infer the meaning of Japanese lexical compound verbs on a written test?

YACHI Michiko

This study investigated how accurately Mongolian Japanese language learners can infer the meaning of lexical compound verbs on a written test. Participants were asked to write inferred meanings of target words under two conditions: the word in isolation, and the word in a simple or complex sentence. The results show that (1) More context is necessary to infer the meaning of the target word accurately, (2) Japanese language proficiency affects the accuracy of the inferred meanings. Compared to the previous research on inferring the meaning of Japanese compound verbs, (Yachi 2012, 2019; Yachi & Komori 2009) regardless of the test format, higher Japanese proficiency leads to a more accurate inferred meaning of the word, regarding of the quantity of context, the minimum amount of context changes depending on the test format. To be more specific, more context is necessary to infer the meaning of target words accurately on a written test, while on a multiple-choice test, less context is necessary to infer the meaning of target words accurately. The difference between a written test and multiple-choice test is the presence of multiple-choices, which may indicate correct meaning of target word. The presence or absence of multiple-choices may affect the amount of context for the accurate inferring of the word meanings.

## 1. はじめに

語彙学習は、文法学習とともに第二言語習得の根幹を成すものである。しかしながら語彙学習は学習対象となる語数が膨大であることと時間的な制約から、教室で語彙に特化した指導が行われることは多くない。ゆえに語彙は学習者が自律的に学ぶ部分が大きく、自律的な学習の中でどのように効率的に語彙学習を進められるかが重要だと言えるだろう。

学習者が未知の語に出会ったとき、「無視する」「辞書を引く」「他者に意味を尋ねる」「意味を推測する」といったストラテジーを用いることが明らかとなっている (Fraser 1999)。「無視する」を除くストラテジーのうち、「意味を推測する」はどのような状況でも用いることができる。しかし、語の意味推測には、文章理解を阻害する、形態的に似た語と誤解する、語の意味推測が習得に結び付くとは限らないなどの問題点があることが指摘されている (Huckin & Coady 1999)。そのことから、どのような条件であれば正確に意味を推測できるようになるのか、検討する必要があると考えられる。

そこで本研究では、語の意味推測においてどのような条件であれば正確に意味を推測できるのかを複合動詞を対象に検討する。複合動詞を対象とするのは、複合動詞は構成要素である前項動詞と後項動詞から当該の複合動詞の意味を導き出せるかが複合動詞によって異なることから、学習困難な語の一つとして広く認識されていることによる。

## 2. 先行研究

複合動詞は結合する語の品詞によって、「N + V型」「V1 + V2型」「A + V型」「AD + V型」に分けることができるが (秋元 2002; 益岡・田窪 1992; 長嶋 1997; 姫野 2001, 2005)、一般的に「複合動詞」と呼ばれるのは、ある動詞に別の動詞が付いた「V1 + V2型」の複合動詞である。「V1 + V2型」の複合動詞の最初の動詞は「前項動詞」と呼ばれ、前項動詞に付いた動詞は「後項動詞」と呼ばれる。「V1 + V2型」は連用形の前項動詞に後項動詞が付いたものと、テ形の前項動詞に後項動詞が付いたものの二種類あるが、本研究で対象とするのは連用形の前項動詞に後項動詞がついた「V1 + V2型」の複合動詞である。この連用形の前項動詞に後項動詞がついた「V1 + V2型」の複合動詞は統語的複合動詞と語彙的複合動詞に分けることができる (影山 1993)。前者は前項動詞が後項動詞の項となるもので、単独動詞としての意味が複合動詞の中で残っているものが多い。一方の語彙的複合動詞は前項動詞が後項動詞の項にならないもの

を指し、意味の慣習化、語彙化が進んでいるものが多い（影山・由本 1997）。

複合動詞は日本語学習者にとって学習困難な語の一つとして知られている。複合動詞が学習困難な理由として、①学習の機会が少ない（森田 1978；郭・徳井 2010）、②複合動詞として可能な単独動詞の組み合わせが複雑である（何 2010）、③複合動詞の中で単独動詞の意味がどの程度残っているかによって指導のポイントが異なる（永井 1996）、といった点が挙げられる。日本語学習者が未知の複合動詞に出会った際、前項動詞と後項動詞の意味を足すストラテジー（以下、V1+V2ストラテジー）を用いることが多いが（松田 2000）、V1+V2ストラテジーで当該の複合動詞の意味をどの程度正確に推測できるかは、前項動詞と後項動詞のもととなっている単独動詞の意味をどの程度知っているかに依存する。統語的複合動詞、語彙的複合動詞のそれぞれの特徴を考えると、統語的複合動詞の方がV1+V2ストラテジーで当該の複合動詞の意味を正確に推測できるが、統語的複合動詞でも後項動詞の種類によってどの程度単独動詞の意味が残っているかが異なる（谷内 2012, 2019）。さらに語彙的複合動詞も語によって意味の慣習化、語彙化の程度が異なっている。しかし、出会った複合動詞が語彙的複合動詞なのか統語的複合動詞なのか、そして、前項動詞と後項動詞の元となっている単独動詞の意味がどの程度残っているかを形態的な特徴から判断することは不可能である。

日本語学習者を対象にした語の意味推測研究は漢字語彙を扱ったものが多い。初期のころは非漢字圏学習者が中心であったが（Mori 2002, 2003；Mori & Nagy 1999；松本 2001など）、近年では漢字圏学習者を対象にした研究も発表されてきている（崔 2015a, 2015bなど）。一方、語の意味推測研究で複合動詞を扱った研究は多くなく、これまでに発表されてきているのは、平山（2007）、谷内（2012, 2019）、谷内・小森（2009）である。

平山（2007）では、姫野（1999）の「複合動詞になった時に単独動詞の意味がどの程度残っているか」という観点を参考に、語彙的複合動詞、統語的複合動詞を分類し、複合動詞の意味理解の違いを多肢選択式で比較した。その結果、①前項動詞、後項動詞のもととなっている単独動詞の意味がどの程度残っているかが、複合動詞の意味理解に影響すること、②語形成パターンに沿った正しい解釈ができるようになるにつれて、語形成パターンによる語解釈も増える段階があることが明らかとなっている。

谷内（2012, 2019）では多肢選択式および記述式を採用し、統語的複合動詞の意味推測の正確さについて検討した。その結果、①多肢選択式では単文程度

の文脈量が、記述式では複文程度の文脈量が、正確に意味を推測するには必要であること、②どちらの解答形式でも日本語習熟度が高い方が正確に意味を推測できること、③どちらの解答形式でも前項動詞と後項動詞のもとになっている単独動詞の知識をどの程度持っているかによって、意味推測の正確さが変わってくること、以上の3点が明らかとなった。

谷内・小森(2009)では、語彙的複合動詞の中でもV1+V2ストラテジーでは当該の複合動詞の意味を推測できないものを対象に、多肢選択式を用いて語彙的複合動詞の意味推測の正確さを検討した。その結果、①日本語習熟度が高い場合、文脈量が多いとより正確に意味を推測できるが、日本語習熟度が低い場合は複文程度の文脈量が正確な意味推測には必要であること、②文脈量が同程度である場合は日本語習熟度が高いほうが正確に意味を推測できるが、文脈がない調査対象語のみの場合は日本語習熟度による差が見られないこと、以上の2点が明らかとなった。

以上のように、どのような条件であれば複合動詞の意味を正確に推測できるかは、複合動詞の種類や解答形式によって異なっている。統語的複合動詞の場合は、正確な意味推測に必要な文脈量が解答形式によって異なるが、日本語習熟度や後項動詞の種類は解答形式による違いは見られない。一方の語彙的複合動詞は多肢選択式における文脈量と日本語習熟度の影響が明らかとなっているものの、記述式においてどのように意味推測の正確さに影響するかは明らかとなっていない。統語的複合動詞は解答形式によって正確な意味推測に必要な文脈量が異なっていたことから、語彙的複合動詞でも解答形式によって文脈量や日本語習熟度の影響に違いがあるのかを検討する必要があると考えられる。

### 3. 研究課題

統語的複合動詞の意味推測では、日本語習熟度と後項動詞の種類の影響は解答形式による違いはないが、正確な意味推測に必要な文脈量は解答形式によって異なっていた(谷内 2012, 2019)。一方の語彙的複合動詞は多肢選択式においては正確な意味推測に必要な文脈量は日本語習熟度によって異なるということが明らかとなっているが(谷内・小森 2009)、記述式において文脈量と日本語習熟度が意味推測の正確さにどのように影響するかは明らかとなっていない。そこで本研究では、語彙的複合動詞の意味推測において、文脈量、日本語習熟度が意味推測の正確さに違いをもたらすかを、調査対象者に推測した意味を書いてもらう記述式を採用して検討する。本研究の研究課題は次の2つである。

- 研究課題 1 記述式において、語彙的複合動詞の意味推測の正確さは文脈量によって違いがあるか。
- 研究課題 2 記述式において、語彙的複合動詞の意味推測の正確さは日本語習熟度によって違いがあるか。

## 4. 研究方法

### 4.1 実験計画

本研究では三つの要因を設定した。第1の要因は文脈の有無で、①調査対象語のみの提示の「単独意味推測条件」、②調査対象語を一文内で提示する「文脈内意味推測条件」の2水準である。第2の要因は文脈量で、(1)調査対象語を単文の中で提示する「単文推測」、(2)調査対象語を複文の中で提示する「複文推測」の2水準である。第3の要因は日本語習熟度で、上位、中位、下位の3水準である。これらの要因のうち第1の要因の「文脈の有無」は被験者内要因で、第2の要因の「文脈量」および第3の要因の「日本語習熟度」は被験者間要因である。なお、研究課題1における「文脈量」に対応するのは第1の要因の「文脈の有無」および第2の要因の「文脈量」である。これらの二つの要因から研究課題1について検討する。研究課題2の「日本語習熟度」については、第3の要因の「日本語習熟度」から検討する。

### 4.2 調査対象者

本研究の調査対象者はモンゴル国国内の大学に在籍する日本語学習者121名で、谷内(2019)と同一の調査対象者である。調査対象者は日本語を主専攻または副専攻のどちらかで学習しており、母語はモンゴル語である。モンゴル国内で使われているモンゴル語では表記にキリル文字が採用されており(ウラムバヤル 2011)、日常生活で漢字に触れる機会はほとんどないと考えられる。

本研究での調査対象者121名のうち分析対象としたのは谷内(2019)での分析対象者と同一の64名である。谷内(2019)では①SPOT\_A、SPOT(ver. D, E)、後述の単独意味推測テストおよび文脈内意味推測テストのすべてを受けていること、②SPOT\_Aの得点が25点以上であること、の二つの条件を満たす64名を分析対象とした。

以上の条件に該当する64名を文脈量要因で二群に、日本語習熟度要因で三群に分けた。文脈量要因では後述の文脈内意味推測テストの冊子をランダムに配布することで、単文推測群と複文推測群に分けた。日本語習熟度要因につい

てはSPOT\_Aの得点を用いて、上位群、中位群、下位群に分けた。具体的にはSPOT\_Aの平均値+0.5標準偏差(42)以上を上位群、平均値-0.5標準偏差(33)以上から+0.5標準偏差(42)未満を中位群、平均値-0.5標準偏差(33)未満を下位群として弁別した。分析対象者のSPOT\_Aの得点を表1に示す。

表1 分析対象者のSPOT\_Aの得点

		平均値	標準偏差	最小値	最大値	N
単文 推測群	上位	47.88	4.26	42.00	54.00	8
	中位	35.78	2.22	33.00	40.00	9
	下位	27.27	1.62	25.00	30.00	11
	単文推測群 全体	35.89	8.94	25.00	54.00	28
	上位	47.50	4.32	42.00	57.00	12
複文 推測群	中位	36.00	3.24	33.00	41.00	13
	下位	29.36	1.96	26.00	32.00	11
	複文推測群 全体	37.81	8.15	26.00	57.00	36
	全体	36.97	8.49	25.00	57.00	64

※65点満点

単文推測群と複文推測群、そして上位群、中位群、下位群のSPOT\_Aの得点に差があるかを二要因の分散分析で確認した。独立変数は文脈量と日本語習熟度要因である。文脈量要因は単文推測と複文推測の二水準、日本語習熟度要因は上位、中位、下位の三水準で、どちらも被験者間要因である。従属変数はSPOT\_Aの得点である。分析の結果、交互作用 ( $[F(2, 58) = .898, n.s.]$ ) と文脈量要因の主効果は有意ではなく ( $[F(1, 58) = .670, n.s.]$ )、日本語習熟度要因の主効果は有意であった ( $[F(2, 58) = 199.958, p < .01]$ )。日本語習熟度要因の主効果が有意であったため多重比較としてフィッシャーのLSD検定を行ったところ、上位群と中位群、上位群と下位群、中位群と下位群のいずれの間も有意であった。この結果から単文推測群と複文推測群の間に日本語習熟度の差はないが、上位群、中位群、下位群の間には日本語習熟度の差があると判断した。

### 4.3 調査対象語

本研究の調査対象語は語彙的複合動詞16語で、谷内・小森（2009）と同一である。調査対象語の選定にあたっては影山（1993）や姫野（1999）などを参照し、『日本語能力試験出題基準【改訂版】』（国際交流基金・日本国際教育支援協会 2002 以下『出題基準』）に掲載されておらず、さらに前項動詞と後項動詞が『出題基準』の2級から4級の動詞で構成されていることを条件とした。本研究の調査対象語の一覧を表2に示す。

表2 本研究の調査対象語

居合わせる	言い寄る	言い渡す	歌い上げる
置き忘れる	押し通す	買い戻す	吸い取る
出し抜く	泣き落とす	飲み歩く	持ち直す
もみ消す	寄り掛かる	笑い飛ばす	割り切る

### 4.4 調査材料

本研究では調査材料として、「単独意味推測テスト」と「文脈内意味推測テスト」を用いた。単独意味推測テストでは調査対象語のみを示した。文脈内意味推測テストでは単文推測群向けに調査対象語を共起語とともに示したものと、複文推測群向けに調査対象語を共起語と意味推測を促すと考えられる表現とともに示したものを用意した。また、文脈内意味推測テストでの提示文は、『現代書き言葉均衡コーパス少納言』や『格フレーム検索』などのコーパスでの用例を参考にしながら作成し、『出題基準』の2級以上の単語にはモンゴル語での語注を付した。さらに、単独意味推測テスト、文脈内意味推測テストの両方で、使用されている漢字にはすべてルビを付した。表3に本研究での提示文とモンゴル語での語注の一例を示す。

表3 本研究での調査材料の例（「居合わせる」の場合）

意味推測条件		提示文	モンゴル語の語注
単独意味推測		いあ 居合わせる	こうぜん 偶然：санамсаргүй げんば 現場：газар дээр нь, тухайн газар
文脈内 意味推測	単文	こうつうじこ げんば いあ 交通事故の現場に居合わせた。	
	複文	みち ある こうぜん こうつうじこ 道を歩いていたたら、偶然、交通事故 げんば いあ の現場に居合わせてしまった。	

本研究では調査対象者の母語であるモンゴル語で推測した意味を書いてもらう記述式を採用した。単独意味推測テスト、文脈内意味推測テストの両方で全ての調査対象語を提示していることから、順序効果を排除するため提示順を入れ替えた文脈内意味推測テストの冊子を10種類用意した(表4)。

表4 文脈内意味推測テストの冊子の構成

テスト① (単文)	テスト② (複文)	テスト③ (単文)	テスト④ (複文)	テスト⑤ (単文)
ダミー	ダミー	ダミー	ダミー	ダミー
		調査対象語	調査対象語	調査対象語
調査対象語	調査対象語	ダミー	ダミー	ダミー

テスト⑥ (複文)	テスト⑦ (単文)	テスト⑧ (複文)	テスト⑨ (単文)	テスト⑩ (複文)
ダミー	ダミー	ダミー	調査対象語	調査対象語
	調査対象語	調査対象語		
調査対象語	ダミー	ダミー	ダミー	ダミー
ダミー				

#### 4.5 調査手続き

調査は2010年10月に、授業時間を利用して実施した。初日にSPOT\_Aと単独意味推測テストを、その数日後に文脈内意味推測テストを実施した。文脈内意味推測テストでは、テスト冊子10種類をランダムに配布した。そして文脈内意味推測テスト実施の数日後に、SPOT (ver. D, E) を実施した。単独意味推測テストと文脈内意味推測テストを行う際に、①調査対象語の意味をモンゴル語で書くこと、②辞書は使用不可であること、③前のページに戻ってはならないこと、の三点をテスト冊子の中でモンゴル語で指示した。

#### 4.6 得点化の手続きと分析方法

得点化にあたっては、まず、モンゴル語を母語とする日本語教師に調査対象者がモンゴル語で記述した意味を日本語に翻訳してもらった。モンゴル語から日本語への翻訳の後、日本語の翻訳を参照して正答と誤答に分類した。分類は

10年以上の日本語教授経験および日本語教育に関する修士号を持つ日本語教師と筆者の3名で行い、3名中2名以上が一致した分類を採用した。3名とも分類が一致しなかったものは3名で協議して分類を決定した。そして、正答を1点、誤答を0点として採点し、分散分析を行って平均を比較した。

## 5. 結果

### 5.1 記述統計量

表5に文脈の有無、文脈量、日本語習熟度ごとの100点満点に換算した平均点と標準偏差を示す。

表5 文脈の有無、文脈量、日本語習熟度ごとの結果

	単独意味推測条件（文脈なし）				文脈内意味推測条件（文脈あり）			
	単文推測群		複文推測群		単文推測群		複文推測群	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
全体	9.38	10.14	9.55	10.72	8.93	6.89	18.58	10.93
上位	15.63	15.31	13.54	15.95	9.38	7.47	23.96	12.16
中位	8.33	6.99	7.21	6.17	11.81	8.53	15.38	8.31
下位	5.68	5.20	7.95	6.90	6.25	3.95	16.48	10.92

平均点を見てみると、どの場合においても非常に平均が低い。意味推測時の文脈がない単独意味推測条件では、単文推測群においても複文推測群においても上位群でようやく10点台であり、中位群と下位群においては10点にも満たない。意味推測時に文脈からの情報を利用できる文脈内意味推測条件においても平均点は高くない。単文推測群の場合、文脈内意味推測条件で最も平均が高かったのは中位群の11.81点である。単文推測群の上位群は9.38点、下位群は6.25点で10点にも満たない。一方の複文推測群では上位群が23.96点、中位群は15.38点、下位群は16.48点である。文脈内意味推測条件では上位群、中位群、下位群のいずれにおいても、単文推測群よりも複文推測群のほうが平均が高い。

### 5.2 三要因の分散分析

文脈の有無、文脈量、日本語習熟度の三つの要因で意味推測の正確さに違いが出るかを検討するため、三要因の分散分析を行った。独立変数は①文脈の有無（文脈なし、文脈ありの2水準で被験者内要因）、②文脈量（単文推測、複

文推測の2水準で被験者間要因)、③日本語習熟度(上位、中位、下位の3水準で被験者間要因)である。従属変数は単独意味推測テストと文脈内意味推測テストの得点である。表6に三要因の分散分析の結果を示す。

表6 三要因の分散分析の結果

変動因	平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
日本語習熟度	934.610	2	467.305	4.330	.018
文脈量	651.954	1	651.954	6.042	.017
日本語習熟度×文脈量	176.866	2	88.433	.820	.446
誤差	6258.802	58	107.910		
文脈の有無	536.292	1	536.292	6.832	.011
文脈の有無×日本語習熟度	72.311	2	36.156	.461	.633
文脈の有無×文脈量	743.519	1	743.519	9.472	.003
文脈の有無×日本語習熟度×文脈量	191.074	2	95.537	1.217	.304
誤差	4552.982	58	78.500		

分析の結果、2次の交互作用は有意ではなく、1次の交互作用のうち「文脈の有無×文脈量」が有意であった。文脈の有無要因、文脈量要因、日本語習熟度要因の主効果は有意であった。

「文脈の有無×文脈量」の1次の交互作用が有意であったため、「文脈の有無×文脈量」について単純主効果の検定を行った。まず文脈の有無要因の各水準における文脈量要因の影響を検討したところ、文脈なし条件では文脈量要因の主効果は有意ではなく( $[F(1, 58) = .00, n.s.]$ )、文脈あり条件では文脈量要因の主効果が有意であった( $[F(1, 58) = 17.79, p < .0001]$ )。ここから、文脈なし条件では単文推測群と複文推測群の間に意味推測の正確さに違いがない一方、文脈がある条件では単文推測群と複文推測群の間に意味推測の正確さに違いがあると言える。

次に文脈量要因の各水準における文脈の有無要因の影響を検討したところ、単文推測群においては文脈の有無要因の主効果は有意ではなく( $[F(1, 58) = .04, n.s.]$ )、複文推測群では文脈の有無要因の主効果が有意であった( $[F(1, 58) = 18.69, p < .0001]$ )。ここから、単文推測群にとっては文脈の有無は意味推測の正確さに影響しないが、複文推測群にとっては文脈の有無が意味推測の正確さに違いをもたらすと言える。

要因の主効果が有意であった日本語習熟度要因について多重比較を行った。多重比較としてフィッシャーのLSD検定を行ったところ、上位群と中位群、上位群と下位群の間の差はそれぞれ有意であったが、中位群と下位群の間の差は有意ではなかった。ここから、上位群程度の日本語習熟度になって初めて、正確に意味を推測できるようになると言える。

## 6. 考察

### 6.1 研究課題1 文脈量による意味推測の正確さの違い

研究課題1「記述式において、語彙的複合動詞の意味推測の正確さは文脈量によって違いがあるか」について検討する。三要因の分散分析の結果、単文推測群においては文脈の有無による意味推測の正確さに違いはなく、複文推測群では文脈がある方が文脈がない場合よりも正確に意味を推測できることが明らかとなった。そして文脈がない場合は単文推測群と複文推測群の間に意味推測の正確さに差はなく、文脈がある場合には単文推測群よりも複文推測群の方が正確に意味を推測できることが示された。ここから記述式における語彙的複合動詞の意味推測では、複文程度の文脈量で正確に意味を推測できるようになると言えるだろう。

この結果は、記述式における統語的複合動詞の意味推測を扱った谷内（2019）と一致しているが、多肢選択式における統語的複合動詞（谷内 2012）や語彙的複合動詞の意味推測の傾向（谷内・小森 2009）とは異なっている。すなわち、記述式においては複合動詞の種類に関係なく、正確に意味を推測するにはより多くの文脈量が必要であると言える。

統語的複合動詞と同様、記述式での語彙的複合動詞の意味推測でも複文程度の文脈量で意味推測の正確さに違いが出た理由について考えてみたい。単文推測群の場合、意味推測に利用できる文脈からの情報は共起語のみである。表3に示した「居合わせる」の場合、「交通事故の現場に」という情報を単文推測群は利用できるが、「居合わせる」の意味である「偶然その場にいる」という意味を導き出すのは困難であろう。一方の複文推測群の場合、「交通事故の現場に」という情報に加え、「道を歩いている」「偶然」という情報も利用することができる。「交通事故の現場に」という情報だけでは「居合わせる」の意味を推測できなかったとしても、「道を歩いている」「偶然」という情報も合わせることで提示文のあらかず場面等が想起でき、「居合わせる」が持つ「偶然その場にいる」という意味を導き出すことができるようになると考えられる。

ただし、複文程度の文脈量で正確に意味が推測できるようになるとはいつても、上位群の複文推測群で20点台程度に伸びたに過ぎない。文脈量が多ければ正確に意味を推測できるようになるとはいつても、読む際の負担を考えると、文脈量が多ければ多いほど良いとは限らない。どの程度の文脈量であれば読みの負担をかけることなく正確な意味推測につながるのか、また、どのような文脈情報を与えれば文脈量を増やさなくても正確に意味を推測できるようになるのか、今後の検討が必要であろう。

次に、多肢選択式の場合とは傾向が異なっていた理由について検討する。統語的複合動詞では単文程度の文脈量で（谷内 2012）、語彙的複合動詞の場合は日本語習熟度が高いと単文程度の文脈量、日本語習熟度が低いと複文程度の文脈量で（谷内・小森 2009）、それぞれ正確に意味を推測できるようになっていた。多肢選択式の語彙的複合動詞の意味推測は日本語習熟度の高低で文脈量の影響が異なっているが、多肢選択式では、記述式よりも少ない文脈量で正確に意味を推測できる傾向にあると言っている。

多肢選択式と記述式の違いは選択肢の有無である。提示された選択肢は意味推測の手がかりとなるため（谷内 2019）、記述式よりも意味推測に使える情報は必然的に多くなる。さらに選択肢には正答として必ず正しい意味が示されている。そのため、選択肢で示された意味と文脈からの情報、V1+V2ストラテジーなどを用いて推測した意味を照合すればよく、その分だけ意味推測は容易となる。以上の理由から、正確な意味推測に必要な文脈量が多肢選択式と記述式では異なっていたと考えられる。

## 6.2 研究課題2 日本語習熟度による意味推測の正確さの違い

研究課題2「記述式において、語彙的複合動詞の意味推測の正確さは日本語習熟度によって違いがあるか」について検討する。三要因の分散分析の結果、上位群と中位群、上位群と下位群の間の差は有意であったが、中位群と下位群の間の差は有意ではなかった。これは記述式における語彙的複合動詞の意味推測では、正確に意味を推測するにはより高い日本語習熟度が必要であることを示している。

統語的複合動詞の意味推測では多肢選択式、記述式ともに日本語習熟度が高いほうが正確に意味を推測できていた（谷内 2012, 2019）。一方の語彙的複合動詞は多肢選択式では文脈がない場合は日本語習熟度による差はないが、文脈量が同程度の場合は日本語習熟度が高いほうが正確に意味を推測できることが

示されている（谷内・小森 2009）。多肢選択式での語彙的複合動詞の意味推測では文脈量によって正確な意味推測に必要な文脈量は異なるものの、本研究での結果と合わせると、統語的複合動詞でも語彙的複合動詞でも、日本語習熟度がより高いほうが意味を推測できる傾向にあると言えるだろう。

日本語習熟度が高いほうが意味を正確に推測できる理由として、日本語習熟度が高いほうが意味推測に必要な語彙知識、文法知識の量が多いことが挙げられる。文脈からの情報を得て語の意味を推測する場合、推測対象となる語を取り巻く文脈が何を意味しているのかを理解することが必須である。日本語習熟度が高ければ文脈の理解も容易となり、意味推測に必要な手がかりも得ることができる。一方、日本語習熟度が低い場合、文脈に未知語が多かったり難しい文法項目が存在したりすると、文脈が意味することを理解することは困難となり、意味推測に必要な手がかりも得ることはできなくなるだろう。

また、V1+V2ストラテジーを利用して複合動詞の意味を推測する際も、日本語習熟度の高低は影響すると考えられる。V1+V2ストラテジーで正確に意味を推測できる複合動詞は、元の単独動詞の意味が複合動詞の中でも残っているものである。ゆえに、もとの単独動詞の意味が既知であれば、当該の複合動詞の意味をV1+V2ストラテジーで推測することが可能となる。

複合動詞に限らず、語の意味を正確に推測しようとするのであれば、高い日本語習熟度は不可欠なものである。文脈から情報を得るうえでも語の構成要素から語の意味を推測するうえでも、日本語習熟度は重要な役割を果たしていると言える。

## 7. まとめと今後の課題

本研究では語彙的複合動詞の意味推測の正確さを、記述式の解答形式を採用して検討した。その結果、記述式では複文程度の文脈量で正確に意味を推測できるようになっていた。これは記述式における統語的複合動詞の意味推測と同じ傾向であるものの、多肢選択式における語彙的複合動詞の意味推測の場合とは正確な意味推測に必要な文脈量が異なっていた。また、日本語習熟度については日本語習熟度が高いほど正確に意味を推測できており、解答形式や複合動詞の種類による大きな違いはないことが明らかとなった。

本研究の課題は次の二点である。一点目は調査対象者が記述した意味の検討である。本研究では「推測した意味が正しいか否か」という観点から分析をした。しかし、「意味の推測が全くできなかった」という状態、「意味を推測して

みたが、当該の複合動詞の意味ではなかった」という状態、「当該の複合動詞に近い意味を推測できたが、当該の複合動詞の意味そのものではなかった」という状態は、それぞれ意味するものが異なる。文脈量、日本語習熟度、ひいては複合動詞の種類によって実際に記述した意味にどのような違いがあるのかを検討することで、複合動詞の何が日本語学習者にとって難しいのかを、より詳しく知ることができるようになるだろう。

二点目は正確な意味推測に貢献する文脈情報の検討である。本研究の複文提示条件では意味推測を促すと考えられる情報を複文という形で入れたが、実際にそれらの情報がどの程度意味推測に貢献したのかは明らかではない。文脈からの情報が多ければ正確に意味を推測できるようになるだろうが、文脈からの情報が多いことは、読むべき量も多いということを意味する。日本語習熟度が低い場合、文脈からの情報が多いと読みの負担も大きい。そのことから、過度な負担をかけることなく正確な意味推測に必要な文脈からの情報がどのようなものが明らかとなれば、日本語習熟度が低い学習者に対する支援を考える上での手がかりが得られると考えられる。

以上の点についてこれからも検討を進め、効果的な語の意味推測について探っていきたい。

#### 参考文献

- 秋元美晴 (2002) 『日本語教師・分野別マスターシリーズ よくわかる語彙』アルク  
ウラムバヤル, ツェツェグドラム (2011) 「モンゴルにおける日本語教育—高等教育機関における漢字教育に着目して—」『言語文化と日本語教育』41, 60-69.  
郭恬・徳井厚子 (2010) 「中国人学習者の日本語複合動詞に関する意識・習得調査」『信州大学教育学部研究論集』2, 73-86.  
格フレーム検索  
< <http://reed.kuee.kyoto-u.ac.jp/cf-search/> > (2022年6月28日参照)  
影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房  
影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』研究社出版  
何志明 (2010) 『現代日本語における複合動詞の組み合わせ—日本語教育の観点から—』笠間書院  
現代書き言葉均衡コーパス少納言  
< <https://shonagon.ninjal.ac.jp/> > (2022年6月28日参照)  
国際交流基金・日本国際教育支援協会 (2002) 『日本語能力試験出題基準【改訂版】』凡人社  
崔娉 (2015a) 「中国語を母語とする日本語学習者における未知漢字語彙の意味推測」『第二言語としての日本語の習得研究』18, 103-119.  
崔娉 (2015b) 「日本語の未知漢字熟語の意味推測に見る中国語を母語とする学習者の推測手

- がかりの利用—漢字熟語の日中対応関係及びL2習熟度の観点から—『言語文化と日本語教育』50, 61-70.
- 永井鉄郎 (1996) 「日本語複合動詞の教育について」『日本語教育』88, 140-151.
- 長嶋善郎 (1997) 「複合動詞の構造」『日本語研究資料集第1期第13巻 語構成』213-231, ひつじ書房
- 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 姫野昌子 (2001) 「複合動詞の性質」『日本語学』20, 6-15.
- 姫野昌子 (2005) 「複合」『新版日本語教育事典』68-69, 大修館書店
- 平山允子 (2007) 「中国人日本語学習者による「V1+V2」型複合動詞の理解—Dual mechanism modelの応用可能性—」『言語科学論叢』11, 59-69.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改定版—』くろしお出版
- 松田文字 (2000) 「複合動詞の意味理解方略の実態と習得困難点」『言語文化と日本語教育』20, 52-65.
- 松本順子 (2001) 「日本語学習者の漢字理解に文脈支持が与える影響—英語母語話者の場合—」『日本語教育』115, 71-80.
- 森田良行 (1978) 「日本語の複合動詞について」『講座日本語教育』早稲田大学語学教育研究所, 69-86.
- 谷内美智子・小森和子 (2009) 「第二言語の未知語の意味推測における文脈の効果—語彙的複合動詞を対象に—」『日本語教育』142, 113-122.
- 谷内美智子 (2012) 「後項動詞の種類からみた日本語学習者の統語的複合動詞の意味推測の特徴—文脈量と日本語習熟度の影響を中心に—」『言語文化と日本語教育』44, 1-10.
- 谷内美智子 (2019) 「日本語学習者の統語的複合動詞の意味推測の正確さ—記述式の場合—」『小出記念日本語教育研究会論文集』27, 5-20.
- Fraser, C. A. (1999). Lexical processing strategy use and vocabulary learning through reading. *Studies in Second Language Acquisition*, 21, 225-241.
- Huckin, T. & Coady, J. (1999) Incidental vocabulary acquisition in a second language: A review, *Studies in Second Language Acquisition*, 21, 181-193.
- Mori, Y. (2002) Individual differences in the integration of information from context and word parts in interpreting unknown kanji words, *Applied Psycholinguistics*, 23, 375-397.
- Mori, Y. (2003) The role of context and word morphology in learning new kanji words, *The Modern Language Journal*, 87, 404-420.
- Mori, Y. & Nagy, W. E. (1999) Integration of information from context and word elements in interpreting novel kanji compounds, *Reading Research Quarterly*, 34, 80-101.

